

「愛する方にあつてという心尽くしの愛」

エペソ人への手紙 1 : 6

October.17.2021

エペソ人への手紙 1 : 6 (パウロ)

Preface

イエス・キリストの身代わりの贖いによって、私たちが罪より救い出されたというのは、私たちがやってしまった失敗を神様が償ってくださったという程度のものではないということを、今お読みしましたエペソ書 1 : 6 の御言葉は教えてくれます。

例えば、我が子が投げたボールが隣り近所の窓ガラスを割ってしまって、今正にこっぴどく叱られようとするところ、親が現れて、「うちの子がご迷惑をおかけして本当に申し訳ありませんでした。きっちりと弁償させていただきますので、おいくらになるか仰って下さい」と言うと、「3、4万円ほどになる」と言われ、プラス1、2万円足して5万円をお支払いしてこっぴどく叱られるところから我が子を取り出したという、親が子の失敗を補ってくれたという程度の話ではないということです。

もちろん聖書を見ますと、神と人との関係を父と子の関係に例えたり、イエス・キリストの血を流さなければならない程に、私たちが失敗して犯したとてつもない罪人であるということを想起させるような箇所もたくさんありますし、キリストの血を流す以外方法がなかったほどに私たち人間が犯した罪が恐ろしいものであるということを確認させる箇所もあります。

しかし、エペソ書 1 : 6 の御言葉は、それらの失敗や罪や罪人ということを遙かに越えて、神が私たち人間を桁違いに愛しておられ、私たちを神ご自身の永遠の目的とまでし、またその救いをもって唯一の神の栄光とするというほどに、私たちが神にとって特別な存在であるという事を教えてくれます。

また、これまでエペソ書の内容を読み進めてきましたように、神が私たちになしてくださった救いは、「一度救い出したから、はい終わり。あとはご自由にどうぞ!」というものではなく、「聖なる傷のない神の子にしよう」というまばゆいばかりの約束の中に生かされており、その約束が成就する栄光の目的地があるということに驚くしかありません。

この驚くしかない程の天上にあるすべての霊的祝福をお与えくださったことを、1 : 6 節では、「神が**その愛する方にあつて**私たちに与えてくださった恵み」と、表現します。(読まない)

エペソ人への手紙 1 : 6 (パウロ)

Part One

ここの「その愛する方にあって」という言葉ほど、私たちが尊い地位や身分やその高貴な恵みに与っているという事実を教えてくれる言葉はありません。

「その愛する方にあって」とは、ご存知の通り「イエス・キリストにあって」ということです。

この「イエス・キリストにあって」という意味の言葉が、1節から何度も繰り返し登場します。

エペソ人への手紙1：1－5（パウロ）

1－5節まで、「イエス・キリストにある」という言葉が、ずっと出てきます。

使徒パウロは、1節から神様がなさった祝福の始まり、過程、結果のどの項目を説明するにあたっても、いつも、「イエス・キリストにあって」という言葉を用いてきましたが、6節に入りますと、ここまでずっと「イエス・キリストにあって」と言ってきた言葉を、(神が)「その愛する方にあって」と言い換えます。

たまたまこう言い換えたのではなく、意図して、意図をもって言い換えました。

どういう意図か？

イエス・キリストが、神にとってどういうお方なのかを知ったならば、そのイエス・キリストの血の贖いによって救いに与った私たちが、神にとってどれほどの存在なのか明らかになると、鮮明になるということです。

つまり、キリストを愛しておられるのと同様に、キリストにある聖徒たちを愛しておられるということです。

今、とんでもないことをあまりにも簡単に言ってしまいましたが、とんでもないほどに神様は私たちを愛しておられます。

このとんでもない私たちへの神の愛を考える時、子に対する親の愛を思い浮かべることがあります。

イエス様が山上の垂訓で言ったように、私たち人間は悪い者ではあっても、自分の子どもたちには良いものを与えようとします。

その姿は、時に滑稽にも見えますが、何かこう温かいものを感じるものでもあります。

私の父母を見てもそうですし、家内の父母を見てもそうですし、私と家内を見てもそうですし、他の親の方々を見てもそうですが、親としていざって時は当然、

普段から我が子しか目に入って来ません。

人間の作り出したねじ曲がったものさしではありますが、ちょっとハンサムじゃなかったり、ちょっと可愛くなかったりしても、また生意気で、言うことも聞かず、面倒の掛かる子だとしても、なんだかんだ言って、我が子が一番ハンサムですし、可愛いと思えてしまいます。

傍から見たら、ちょっと親のエゴのように映るかも知れませんが、なぜでしょう？ その本能には逆らうことは出来ません。

どの親にとっても、我が子と同じほどにハンサムで、可愛い子供はいません。

しかし、神様は唯一の我が子イエス様を愛しておられるのと全く同じように、人を、キリストにある聖徒たちを愛していると仰います。

ひとり子イエス様の着ぐるみをはがし、体を裂き、血を流し、死なせるほどに、神は私たちを愛しておられます。

人の親には決して出来ないことを、父なる神はなさいました。

これこそ、人間業ではなく、神わざです。

この神の愛に驚愕出来るように、人間のエゴにしか見えないような本能的な我が子に対する偏愛を私たちにお与えくださったのかもしれませんが。

この神わざとしか言いようのない愛で私たちを愛しておられるということ、
「イエス・キリストにあつて」という言葉から、「その愛する方にあつて」という言葉に言い換えて、パウロは言い表したかったわけです。

神様は、私たちをご自分の子にしようと、ただ何となく選び出したのではなく、「その愛する方にあつて」、即ち、途方もなく滅茶苦茶な法外な愛による愛で愛しておられるということ、使徒パウロは私たちに確認させたかったわけです。

Part Two

さらに、この「愛する方にあつて」という言葉には、不自然さがあります。

それは、本来、目的であるべきお方が、手段になっているということです。

普通、親は、良いか悪いかは別として、我が子を目的と定め、それ以外のものを手段として用いて、我が子に良かれと思うことをします。

普通ならば決して、他の誰かのために、我が子を手段として差し出す親はいません。

しかし、父なる神様は、二人としない唯一の愛する我が子イエス様を、私たちを罪より贖い出すために手段として用いてしまいました。

親として有り得ないことをなさいました。

父なる神があり得ないことを実際になさったというのを、パウロは、「その愛する方にあって」という手段を表す表現を用いて、教えてください。

私たち罪人を、キリストにある聖徒たちを目的とし、イエス・キリストを手段としてしまっていることが、どれだけ話にならないような非常識で、えげつなく、ど偉いことなのかを、この御言葉のすべての読者に訴えたくて、それまでの「イエス・キリストにあって」という言葉を、「その愛する方にあって」と言い換えたわけです。

私たちの罪を贖うためにお金を支払うとか、あってもなくてもいい物でその代価を支払うのではなく、神様が最も愛しておられる方を代価として差し出して、キリストと同等の価値を私たちに付与し、また見出して救い出し、私たちへの神の愛をお表しになったということです。

そして、キリストと同等の価値を付与され、見出されながら救われたキリスト者は、「ただ罪赦されて良かったとか、ただ失敗を補っていただいて良かったとか、ただ天国に行けて神様に感謝だ」と言う感傷に浸ることで満足するのではなく、

そこから出て行き、驚きをもって神をほめたたえ、喜んで、神の栄光を告白しながら、私たちが高くて高貴な究極的な目的地、地位、定めにあることを覚えて、愛を受けた者として、愛を始めるように、愛を作り出すように促されています。

パウロは、私たちを感傷に浸らせるために、「その愛する方にあって」と言ったわけではありません。

キリストと同等の価値を神様から見出された者として、キリストがなさった愛に生きることを促すために、「その愛する方にあって」と言ったことが、エペソ書を読み進めて行きますと見えてきます。

エペソ人への手紙 5：1－2（パウロ）

イエス様と同じほどの価値があるというのは、「ああ良かった。僕は、私は何て幸いなんだ！」と自分のことを満足させることに満足する者ではなく、キリストのように、愛のうちに歩むことです。

Part Three

イエス様の12弟子のうちの一人ピリポが、イエス様に「私に父なる神様を見せてください」と言ったところ、イエス様が「ピリポよ、こんなにも長い間わたしと共にいるのに、父なる神を見なかったというのか！ わたしを見た者は、父なる神を見たのだ」と返答しながら、父なる神と御子イエス様がひとつであることをお示しになりました。

そしてさらに、イエス様が十字架に架かる前夜、血の汗を滴らせながら祈った

祈りの中で、こんなことを仰いました。

ヨハネの福音書 17 : 21－23 (パウロ)

「父なる神が御子イエス様のうちにおられ、父と御子がひとつであるように、御子イエス様が私たちのうちにいてくださり、御子と私たちがひとつである」と祈ります。

父なる神と御子なるイエス様がひとつであって同等であるように、その存在価値にあって、「御子イエス様と私たちとは同等だ」と仰るのです。

もちろん、父なる神・御子なるイエス様は創造主なる神であり、私たちは神に造られし被造物で土くれに過ぎない存在ですが、その存在価値は同等だと仰り、栄光まで彼らに与えたと仰います。

ただここで注意深く読まなければならないのは、その栄光が、キリストと同等の権威や地位をもって偉ぶり、人を見下げ、裁くためにある栄光ではなく、イエス様がここで祈ったように私たち自身がひとつとなる、つまり、愛された者として、互いに愛に生きることをもって、その栄光をあらわすことを求めておられます。

「愛に生きることをもって、世が、私たちが神に愛されている者だと知る」と言うのです。

つまり、人々が私たちを見て、キリストの愛を見、神の愛を見るようになると、見るように生きることをイエス様に求められています。

それが、

エペソ人への手紙 5 : 1－2 (パウロ)

ということです。

これをもっと具体的に、イエス様がこんな風におっしゃいます。

マタイの福音書 5 : 43－48 (パウロ)

「イエス・キリストにあってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定められた」というエペソ 1 章の御言葉が、ここに繋がります。

「天におられるあなたがたの父の子どもになるため」に、自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈らなければなりません。

世界の基が据えられる前から、キリストにあって傷のない聖なる神の子ども

として選ばれ、朽ちることのない御国を受け継ぐ者、その愛する方であって救われた者たちは、いつまでも自分が救われた事実だけにすがって生きるのではなく、敵を愛し、迫害する者のために祈ることをもって、神の子であるということを示すのです。

神の救いは、100%神の恵みであるがために、私たちに救いを選び取る権利はありません。

権利は神のものであって、私たちのものではありません。

私たちにあるのは、提示された救いの恵みを選び取る責任があるのみです。

そして、責任をもって救いの恵みを選び取ったならば、今度は、とんでもない愛を経験しその愛を身に帯びたために、「愛する」という責務が伴うようになります。

その責務を諦めたならば、父の子どもらしく、その方にある聖徒らしく、クリスチャンらしく生きることを諦めたことになります。

Part Four

このイエス様の要求を、嫌なことを、不可能なことを、無理なことを要求しておられるという次元で見るのではなく、「なぜ、このような要求をされるのだろうか？」と考えてみてください。

神様は、私たちが何者ゆえにこんな要求をされるのでしょうか？

なぜ、敵のために祈り、敵を愛しなさいと仰るのでしょうか？

それは、神様が私たちを、「その愛する者」として呼んでおられるからです。「その愛する方」とイエス様をお呼びになるように、私たちのことを「その愛する者」と呼んでおられるからです。

「天の父なる神様が完全であるように、完全でありなさい」という要求を命令としてだけ聞くのではなく、

私たちが、その完全な神様の子として、完全で栄光なる方の無限の豊かさに入れられた者として呼び出されているからこそその要求であることを覚えなければなりません。

私たちが、私たちの力で家を守り、私たちの力で所有を、名誉を、利益を、実績を守り、私たちの力で守った物しか持ち合わせていないような者ならば、誰かが私の服を奪い取っていた時には一文無しになり、誰かが私の食べ物を盗んで行った時に飢えるという次元で生きているならば、私たちは敵を愛することは出来ませんし、襲い掛かってくる者たちを容認することも出来ません。

でも、「敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい」という言葉の中には、「天

の父の子どもだから」という条件が付くからこそその要求であることを覚えなければならないんですね。

無から有をお造りになる方が父で、その方の愛する子であるがための要求です。

家を、車を、お金を、名誉を、実績を、所有をくれと言われて、奪われまいと血まなこになって奪われまいと争う必要がないのが、すべてを統べ治め所有しておられる神を、父とする私たちキリスト者のはずです。

名誉も、プライドも、傷ついた心も、赦せない心も、納得のいかない気持ちも、実績も、お金も、所有も、求められた時どれだけ与えることができるのか、どれだけ手放すことができるのか、これがキリスト者の信仰の力量を計る試金石となります。

私たちが誰で、神と私の関係が、どういう関係にあるのかをどれだけ理解しているのかに従って、私たちから愛と余裕と譲歩が出てくるのです。

Part Five

聖書が私たちに「あなたたちはキリスト者だからこうこうしなさい、こんなことあんなことしちゃいけません」と言う時、何を根拠にして言っているのか見てみたいと思います。

コロサイ人への手紙 3：12－15（パウロ）

すべての要求が何を根拠にしていますか？

私たちがどれだけ祝福された地位、栄光、高貴な者として呼び出され、また、救いに与った神の子という身分の持つ栄光が、どれだけ豊かで富んでいるのかを知っているならば、その他の問題において争う必要性はないという境地からの要求だということが分かります。

誰が正しくて、誰が間違っていて、誰がイケていて、誰がイケていないのかという争いをする必要がなくなります。

いつ戦いが起こり、競争が起こるのかと言いますと、褒美が少なく、それを獲得しようとする者たちが多い時、争いが起こり、競争が起こります。

でも、私たちが招かれ、私たちが受け継ぐと約束されているものは、キリスト者が神の子であるという栄光を味わう上で、どんなに私たちの所有を分け与えても減るものではなく、他者が揺るがしたり、奪い去っていくことなんか決して出来ないものです。

だから、求められているんです。

神に選ばれている者、聖なる者、愛されている者として、求められているんです。

神は、イエス・キリストを愛しておられるように、私たちを同じように愛していると仰います。

だから、要求なさるんです。

そして、私たちは深い慈愛の心、親切、謙遜、柔和、寛容、忍耐、赦し合いを実践するんです。

なぜか？

あまりにも余裕のある者として立てられているからです。

もし、私たちが誰かを許すことが出来ないならば、誰かを忍耐できないならば、誰かを愛と深い慈愛の心と親切で接することを拒むならば、私たち自らが何者なのかを悟れていないということを雄弁に物語っていることになります。

ちょっと言葉が過ぎると思われるかもしれませんが、他者に辛辣で手厳しく、自分だけの狭い考えに捕らわれ、簡単に怒りを表し、影で他者を批判し見下げ裁き、影愚痴を口にし、誰かに向かって妬みを持ち、嫉妬し、攻撃し、争うならば、私たちは、無限の豊かさを持つ神様の御前で、神の子としての豊かさや富や余裕を所有していることを悟ることが出来ておらず、世知辛く、けち臭く、薄情に生きている“物乞い、乞食”と、自らの額に書いて生きていることになるでしょう。

Conclusion

私たちはその愛する方にあつて、愛される者となった神の子です。

神様が、私たちに聖なる者として愛を要求されるのは、栄光のうちに私たちを召し出し、愛しておられるからです。

出来なかったからと罰を与え、合格不合格を決めるための足切りのために、愛を要求しておられるのではなく、私たちを愛しておられ、栄光なる者に相応しくあるためです。

神様が私たちをどのように呼び出しておられ、私たちにお与えになる栄光が何なのかを知っているならば、喜んでやりたくなるのが、神の要求であり、愛の実践です。

私たちを見て、人々がそこにキリストを、神を見ることを願わずにはられません。

お祈りいたします。

祝祷：コロサイ 3：12－14